



荒井伊左夫著（宮澤清治監修）

信州の空模様

信濃毎日新聞社 1988年7月刊

A 5版, 336頁, 1600円

夏休みに帰省中、本書の宣伝を信濃毎日新聞の広告欄で見つけ、早速書店で購入して読んでみた。長野県の気象がどのようなものであるか、は信州で暮らしたことのある人はだれでも関心があることであろう。信州は本州のまん中にあり、まわりを3000メートル級の山々で囲まれた内陸に位置し、四季の変化の激しい日本にあって、独特の空模様と季節変化が見られる。本書は、第1章の「気候と季節」で信州の気候の特徴を概観したあと、以下、「春」、「雨」、「夏」、「風」、「秋」、「冬」と続き、一年を通しての信州の四季の移り変わりを86の項目に分け、エッセイ風に解説している。雲、雪、雷、風の話、集中豪雨や雪崩災害の話、さらに霧雪やオーロラ観測の話などから、信州の空模様の特徴を浮き彫りにさせ、また、至るところに古くからの言伝えやことわざ、農事歴を挿入して、気象現象や気候と人々の生活との関係の深さを浮き彫りにしている。本書を読んで、軽井沢で生まれ育った筆者には、日頃馴染みのある気象現象が改めて新鮮に感じられた。

日本の天気や気候、四季の移り変わりなどに関する本は数多く出版されているが、本書は、日本の四季を特徴づける温帯低気圧や台風の通過に伴って、信州ではどのような空模様になるかについて具体例を示しながら紹介している。例えば、北西の季節風が強い日には、県北部は大雪になる。一方、上空に寒気が張り出している日に、本州南岸を東シナ海低気圧が通過すると、県南部が大雪になる。地元の人々はこれをシモ雪、カミ雪と呼んで区別していたことや、「大雪の次の日は裸の洗濯」ということわざの紹介など、読んでいて納得するところが多い。筆者は子供の頃、せっかくな積もった雪がポカポカ陽気のため1日もたたないうちに解けてしまうのを残念に思ったものである。

第8章は「気象と観測」というタイトルがつけられ、長野県にある気象台、測候所がいつ設立され、どのようにして今日に至ったかに関する簡単な歴史と、そこでどのような観測や業務が行われているか、天気図の読み方や日本における代表的な気圧配置の解説などが記されている。これは、今年は長野地方気象台の前身、長野測候所が設立されて百周年にあたり、この機会に信州の空模

様を改めて見直し、気象観測業務の次の世紀への出発点にしたいという著者の念願の表れである。

著者は長年、長野地方気象台で天気予報に携わっており、天気予報を的中させることのむずかしさや過去の観測記録や経験をもとに天気を予測するおもしろさも読者に伝えている。

本書の記述は専門的でなく、低気圧や前線、大気の大循環など、気象の変化や風の流れに関する基礎的な事柄についても、随所に簡単な解説がなされており、気象学を学んでいない読者に親切である。また、付表として、長野地方気象台、諏訪、松本、飯田、軽井沢の各測候所の平年値および極値があり、参考文献も数多くあげられているため、信州の気象現象や気候を研究するに当たった入門書としても役に立つであろう。

川上紳一（岐阜大学教育学部）

この本は、四季折々に現れる気象現象とその原理をやさしく解説したもので、一般教養の書、あるいは気象災害に対する啓蒙の書ということができよう。

この種の本としては、昭和31年に気象庁天気相談所職員有志が書き上げた「日本のお天気」を筆頭に、多くの本が出版されており、一般国民から寄せられる気象に関する「なぜ」の質問に、何とか分かりやすく答えようとする努力のなからうまれている。これらのなかで、特にこの本が目を引きするのは、気象解析事例や気象にまつわる話題を豊富に取り入れ、やさしく解説している点にあると思う。

著者は、身の回りで起こる気象現象に常に目を配り、その現象に係わるデータをその時々、お天気日記として記録したり、新聞や文書の切り抜きをスクラップブックに貼り付けるなどして、蓄積してきたという。信州の気象をじっくりと腰を据えて見続けてきた著者が、半生かけて集めたデータをふんだんに引用して書いたこの本には、大きな説得力があり知らず知らず各頁の話題に引き込まれて読み進んでしまう。

書名のとおりに、長野県の気候に重点をおいて解説されたものであるが、全国共通の現象も多く、広く親しまれる本となりそうだ。

（気象庁予報部予報課 飯島邦彦）

二人の会員から、ほぼ同時に投稿がありました。飯島会員に、重複等为了避免するための改稿を行っていただいています。

（担当委員高瀬）